
セブンストラゴン2020

しゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セブンスドラゴン2020

【Zコード】

Z6840Y

【作者名】

しゅん

【あらすじ】

暇つぶしに最適な作品です！ 著者が原作ゲームを未プレイなどで原作の展開を力チ無視です、勘弁して下さい。

電波塔からの最後の風景

殺人現場でも目撃してしまったのだろうか。

望遠鏡から、少し広いおでこを離し、彼女が俺に振り返った。

ここに来たときに比べその表情は暗く沈んでいる。

「どうしたの？」

聞くが彼女は答えない。

「大丈夫？」

「何が見えたの？」

聞くと彼女は、小さな手で俺の腕を驚づかみ、望遠鏡の前に立たせた。

俺は彼女に代わって、膝を少しだけ曲げ、望遠鏡を覗きこんだ。

真っ暗だった。

交代と同時に、時間切れになってしまったようだ。

展望台では双眼鏡を借りることもできたが、彼女の希望により、有料の望遠鏡で東京の風景を見ることにしたのだ。

俺も異論は無かつた。

遙々東京に来たのだから、いちいち値段のことなど考えたくなかつたからだ。

とは思ったものの、これ程時間が短いとは予想外だった。

双眼鏡の方がよかつたかも知れない。

「ちょっと待つて。」

彼女に言い、尻ポケットに入れた財布から百円玉を取り出した。

「何が見えたの？」

と硬貨を投入する前に、再度聞いてみると返答はなかつた。

「…。」

彼女は何も言わず、早く見てと田で訴えてきた。

本当に、殺人現場でも目撃してしまつたのだろうか。

だつたら急がねばなるまい。

俺は望遠鏡の角度を変えることなく硬貨を入れた。

金属が流れる乾いた音と共に、視界が明るくなり、俺の田に巨大な翼が映つた。

そして展望台が揺れ、俺達はその場に倒れるのだった。

東京が影に覆われた。

都市の上空が翼の生えた生命体・後に『ドラゴン』と正式に命名される・によつて埋め尽くされた。

レーダーに補足されず、どこから出現したのかも不明。

警察、自衛隊、政治家は、突如出現したドラゴン達にどう対処すればいいかもわからず、一般人に紛れただ偶然と見ていたのだった。

超高層ビルが乱立する都市を見下ろし、一匹のドラゴンが飛んでいく。

ドラゴンは遙か前方にそびえ立ち、都心に巨大な影を落とす『塔』を目指していた。

滑空するように一直線に進み、やがて足が届く距離となると、翼を垂直に広げ減速し、塔の回りをグルグルと周り始めた。

飛び回りながら鋭い眼光を塔へと向け、鉄骨作りの表面を吟味する。

赤い鉄骨によつて組み立てられたその塔は都内の超短波を送受信する設備を収容する電波塔であった。

東京タワー。

高さ二二五三メートル。

たつた一人の設計士によつて図案は書かれ、建造は命綱一つに身をつつみ、狭い足場とビル風に翻弄されながら生身の男達に建てられたものだ。

建設期間は延長し、鉄骨部品が足りなくなつた際には戦車を溶かして金属を集めたといつ。

先人達の偉業であり、技術の結晶ともいえる建造物である。

ドラゴンは後ろ足で鉄骨をつかみ、翼を下ろし重心を前に倒すことで塔へと着地した。

塔は垂直なので着地といつよつしがみついていとつ方が正しいかもしけない。

翼を折りたたみ、しがみつくその姿は、東京タワーに巨大なコブができたようであった。

ドラゴンは空を見上げ、金色に輝く粉を吐き出し始めた。

ドラゴンの口からは噴水のように粉が吹き出し続け、太陽に照らされたそれらの粉は、東京タワーを中心に東京全域へと、円を描くよ

うに均等に広がっていくのだった。

旋回を続けていた他のドラゴン達は、翼で空気を叩き落とし、それは風として地上を駆け巡った。

歩道から立体高速、山手線の上から、東京メトロの地下鉄、さらには歌舞伎町の裏路地という裏路地の隅々まで風は吹いた。

するとビックリ。

宙に漂っていた金の粉は風に乗り、地上へと流れたのだ。

それから数分後、粉塵は肥大しやがて開花し、毒々しい色の花を咲かせるのだった。

後にそれらの花々は、滅びを呼ぶ花『フロワロ』と名前される。

そして、フロワロの開花から、数時間後、ドラゴン達による本格的な『侵略』が開始され、國家を守るべく自衛隊による『防衛戦』が展開されるのであった。

201 新宿駅にて（前書き）

ドラゴン襲来から数十年後、東京にて。

N o 1 新宿駅にて

東京都庁より中央通りを東に進むと新宿駅である。

新宿駅とは言つものの、駅の面積は私鉄の駅とは比較できないほど広く、そして複数の路線が走るため構造は複雑なのだ。

初めて新宿駅に訪れると、乗りたい路線がわからず迷子になつてしまふほどである。

『新宿駅にて』とは言つたものの、一言で伝えてもわからないのが普通だ。

厳密な場所は、新宿駅のバスター・ミナルである。

曲がりくねつたバス停留所と、それを囲むガードレール、そしてところかしこに見られる、新宿駅地下へと続く階段。

ドラゴンや怪物達による攻撃を受けたものの、ここにはバスター・ミナルらしい面影が残つていた。

そして数分前まで、このバスター・ミナルで銃声が鳴り響いていた。

突撃銃を構えた十人が扇状に広がり、一匹のドラゴンを取り囲んでいた。

『ビッグカメラ!』と看板のたつビルが背後にあるため、怪物には

逃げ場が無く、ジリジリと押し寄せる銃弾の壁に追いやられていく。

客観的に見れば、陣形を組む戦闘員達が優勢であるようにも見えるが。

だがドラゴンには慌てる様子がない。

むしろ楽しげに尾をパタパタと振っている。

青い鱗に覆われた胴体と、首から尾までが蛇のように細長い。

背中に生えた翼が空を叩き、地面ストレスに浮かぶその『ドリゴン』は、『ケミカルドラゴン』と名称される小型のドラゴンであった。

どうこうの習性があるのか不明だが、全てのケミカルドラゴンは玉乗りをするように、巨大な椰子の実のような物体にしがみついているのが特徴だった。

ケミカルドラゴンは長い首を持ち上げ、陣形を組む戦闘員達を見回した。

なりやまない銃声と閃光に怯むことなく、最新装備に身を包んだジエータ隊員一人一人を吟味しているかのようだ。

「陣形を緩めて距離を取れ！」

扇の中央に立っていた男が左右へと指示を出す。

ケミカルドラゴは長い首が持ち上げ、一度後ろに頭を引くた。

そして勢いとともに前へと突きだし、次の瞬間、緑色のヘドロを吐き出した。

まるで人間がツバを遠くへ飛ばすような仕草である。

優勢に見えたはずが、ケミカルドラゴが吐き出した毒が陣形を崩し、隊員達の最新鋭の装備を破壊した。

「カバー！」

かけ声と共に、重傷者を囲む隊員達。

「大丈夫か！？」

「しつかりしろ…」

毒に侵された仲間を引きずり、それを背にした一人が再び突撃銃を構えた。

「作戦中止だ！お前達は撤収しろ！」

弾倉を入れ替え、引き金の横に備えられたレバーを下げる、迫つてくる敵の頭部に標準を合わせた。

「隊長！？」

傷の深さが違うだけで、負傷したのは全員同じだった。

皆が毒に侵され、治療が遅れれば危険な状態なのだ。

それでも誰かが敵を引き止めなければ、全員が命を落としてしまう。

「早く行け！」

ぐらつく足腰に渴を入れ、隊長と呼ばれた男は引き金を引いた。

パン、パン

と、長い銃身の先から一発ずつ弾が放たれる。

集団包囲よりも正確な狙いが、ドライコンを放ませた。

ビクンと首を持ち上げ、翼を広げ距離をとるよう飛んでいく。

「行け！今しかない！…」

隊長は振り返らずに叫び、逃げるドライコンを追おうとした。

ケミカルドライコンがみついていた木の実を捨て、大きく羽ばたいた。

ゴーグルに粉塵がぶつかるが、怯まずに威嚇射撃を続ける。

ドライコンは宙をグネグネとうねるよう飛び回ったかと思つと、次の瞬間、隊長へと一直線に飛んできたのだ。

よけようとするが間に合わず、ドリコンの頭突きに身体が吹っ飛ばされる。

「…」

鉄骨のガードレールへ衝突し、意識が一瞬とんだ。

だが顔を上げるとドリコンが再び飛んできた。

休む間もなく、地面を転げそれを回避する。

起き上がると同時に、迎え撃とつとするが、突撃銃は今の一撃で手元を離れてしまっていた。

しまった、と思つ間もなくドリコンの牙が向かつてくる。

慌ててベルトを触ると固い感触が。

そして手から伝わる形から、その正体が解つた。

「グアアアアアアアアア…！」

望みと共に、迫る真っ赤な口へそれを投げつけた。

強力な爆風と共に、金属の塊が弾け飛ぶ。

…はずだつた。

「一。」

地面に接した自分の視界に無骨な塊が転がった。

投げられた手榴弾は破裂することなく、元の形のまま地面に落ちた。

「…。」

最後の抵抗も虚しく終わつた。

「ハハ…ハ。」

自分の不甲斐なさに出てくるのは笑みだけであつた。

まさか、安全ピンを抜き忘れるとは。

あきらめかけたその時、ブゥン、と耳元で何かが飛んでいった。

そしてケミカルドラゴが悲鳴を上げた。

翼が止まり、ズズウンと粉塵を巻き上げ、地面に腹をついたのだ。

倒れたドラゴンは狂つたように頭を振り回していた。

その頭には一つの意味で見慣れない物が突き刺さつていた。

自分が指揮する部隊の人間が所有していないことと、武器としては時代遅れであるといつこと。

突き刺さっていたのは一本の短刀であった。

誰が投げたのか。

振り返る間もなく、地響きと共に自分の脇を走つていぐ一人の背中。やはりそれは部下ではない。

服装も武装もまるで違ひ、まったく見慣れない姿であつたからだ。誰なのかはわからなかつたが、その背丈と肉体から男であるということだけはわかつた。

再び飛行しようと体位を立て直したケミカルドラゴン、そして走る背中は一直線にそれへと走る。

ドスン、ドスンとブーンの音を響かせ、二メートル近い巨体が走る。

頭を下げ、肩を盾に風を切る巨体。

地面を蹴り、全ての加速と重量をドラゴンへと吊りつけた。

破壊鉄球のような一撃に、ドラゴンは悲鳴も上げずに吹っ飛び、新宿駅の地下道への壁を突き破つた。

「嘘だろ…？」

体当たりをかました人物は素手ではなかつたろつか。

陣形と銃撃をもつてしても苦戦する相手を叩き落とすとは。

地下へ落ち、見えなくなつた一人と一頭。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから。」

声と共に金属の擦れる音が自分の横を通り過ぎた。

呆気に取られ、未だ倒れている自分の前に、刀を構えた女の背中が立つたのだ。

腰まで伸びた黒炭のようだ黒い髪と、白衣シャツ。

そしてミニスカートにニーソックスといつこの場には不似合いな姿であった。

まさか戦つつもりなのだろうか。

刀を構えている時点がどうだろうが…。

彼女は先程の巨体に続き、粉塵の中へ飛び出していった。

N o 2 二人の精銳

「新宿駅に出現したケミカルドラゴに対し負傷した模様、直ちにメディカルルームへ移送せよ。」

「現場に残った人数は?」

「第三小隊の隊長、一名のようです。」

「了解。」

負傷者を担架に乗せ、衛生兵がビルへと入っていく。

このビルは東京都庁。

かつては東京都における様々な事務を執り行つ役所であった。

現在はドラゴンから東京を奪還するための砦として機能していた。

砦を指揮するのは政府が有事に備えて組織した、『特務機関ムラクモ』である。

「ケミカルドラゴ討伐のため、付近にいたムラクモの戦闘員が増援に向かつたらしい。」

手当てを受けていた隊員のもとに報せが届いた。

「人数は?」

「一人だ。」

思わず包帯の巻かれる腕を振り上げそうになつた。

特務機関ムラクモの任務は東京の奪還であり、個人の救出ではない。それを受け持つ部署もあるが、あくまで首都奪還の作戦を基盤にムラクモは機能しているのだ。

生死の定まらない一人のジエータイのため、これ以上増員されることはないだろ？

「安心しろ。特務機関ムラクモでも精銳の一人組だそうだ。」

肘を曲げ、柄を持った右手を耳の後ろで止める。

左手を刀身のミネに添え、肩の力と腰を落とす。

まるで弓を引くかのような姿勢だが、構えているのは刀である。

眼下には地下へと続く階段。

本来なら、地上に面した部分は屋根と壁に覆われているが、それは一分前に相棒が壊してしまつた。

階段の奥は粉塵と暗闇に隠れ何も見えず、ただ一つの巨体が蠢いているのが直感できた。

ドリゴンの咆哮と、拳のぶつかる音、そしてむき出しのコンクリートの臭い。

相棒は戦い続けている。

「デスさん、大丈夫！？」

下へ向かつて叫んでからしばらくすると、蠢いていた一人が地上へと顔を出した。

男は彼女よりも五段下の段に足をのせているが、彼女の目線は相棒のサングラスにピタリと合つた。

「大丈夫だ、敵も弱らせた。止めは任せたぞ。」

ギターの低音が唸るような声で相棒は返事をし、彼女と同じ段差へ立ち拳を構えた。

不似合いな二人が並んだ。

三十センチは違うだろうか。

銃撃と、体当たりの一撃に加え、地下での拳による一騎打ちを受けたのだ。

ケミカルドラゴンは弱っていた。

「」で刀による一撃は決定打となるだろ。

それを悟っているのか、ドラゴンはなかなか地上へと顔を出さない。

「…。」

「…。」

「グルル…。」

「…。」

「…。」

粉塵の中から飛び出したのは毒のヘドロだった。

「デスさん…」

刀を構えた彼女を庇うように、相棒はそれを背中で受け止めた。

「ちつ…。」

「デスさん…」

「グルルルルルルアア…！」

「俺にかまうな！止めをさせー！」

膝をつく相棒を尻目に、女は腰を少し引いた。

胸を張り、肩胛骨をくっつけるかのじべく刀を持った腕を引く。

咆哮と共に、ケミカルドラゴが粉塵からぬうつと顔だけを現した。

ゴツゴツした青い顔には、赤い液体が滝のように流れている。

デラゴンの頭部には脇差しによる傷が残っていた。

女は上半身を半回転させ、右手で支えていた刀を傷痕へ向け貫いた。

両端が壁に包まれた階段では、断末魔の叫びが永遠と反響していたのだった。

203 特務機關ムラクモ

午後二時だが、時刻を問わず東京は薄暗い雲に覆われていた。

ドラゴン襲来のその日から、一度も青空が東京上空に広がることはないなかつた。

陽の光もほとんど届かなくなり、本来少なかつた東京中の自然は枯れ果てていた。

灰色の空とは対照的に、地上には極色の花が咲き乱れている。

その花、フロワロである。

コンクリートの地中に根を張りめぐらせ大繁殖をするフロワロ。

ドラゴンだけでなく、この外来種によつても東京は侵略されている。

そしてフロワロのまき散らす花粉が、人を毒に侵し、ドラゴンとは別の怪物を生み出す原因でもあつた。

フロワロの撲滅と、ドラゴンの討伐。

この一つが首都東京を奪還するための最重要課題であつた。

「ハイ、ヒーロー！超余裕でドラゴン討伐と救出任務をクリアしあつて聞いたぞお！」

「余裕……じゃないよ。助けるつもりが助けられちゃったし。」

東京都庁のロビ にて、一人の女がカスタマーサービスのような力 ウンター越しに話していた。

ここは都庁内で暮らす一般市民からの依頼が申し込まれる部署であった。

ムラクモに属する戦闘員は各自の任意で、ここで依頼を受ける。 もつとも依頼を受けるのはあくまで、ムラクモからの指令が下りない時だけだが。

「助けたジエータイと一緒にあのデカブツを運んだのか？」

「うん。デスさんは身体が大きいから、私一人じゃ運べなくて。」

女の一人はケミカルドラゴンにどどめをさした黒髪の女である。

セーラーシャツとミニスカートにニーソックス、そしてベルトには脇差と日本刀を備えられている。

列記としたムラクモの戦闘員であり、コードネームは『サムライ』

であった。

対する人物はこの部署を管理する、『チエロン』といつも銀髪の女であった。

「あの『デカブツ』でも治療が必要とは意外だよな・・・。」

「そんなこと言わないでよ。デスさんは私を守ってくれたんだよ。」

「だってヒーローの相棒、シユワルツネッガー扮するターミネーターとやつくりだよ? おまけにいつもサングラスだし。」

「・・・それは私も時々思うナビ。」

等と二人が話していると、遠くからブーツの音が響いてきた。

見ると二メートル近い巨体の男が廊下の真ん中を悠々と歩いている。

噂をされていた本人、「デスさん」である。

「こりでターミネーターのBGを流せば、映画のワンシーンと重なるだろ?」

廊下をすれ違う一般市民全員が彼へと振り返っているほどだ。

サムライが「デスさん」と呼ぶが、その男の本来のコードネームは『デストロイヤー』である。

ケミカルドラゴンとの戦闘で見た通り、素手で怪物と戦う、近接戦闘のHキスパートであった。

「おおお。噂をすれば・・・。もう治療が済んだのか？」

「デスさん。身体はもう大丈夫・・・？」

何の噂をしていたのか気になつたデストロイヤーだったが、「大丈夫だ。」と相棒への返事を優先するのだった。

「『』めんね私が油断しちゃつたから。」

「命があつたんだ、次から気をつけねばいい。」

「そう・・・だけど。」

俯くサムライを前に、デストロイヤーは責める「」ではなく、ただ黙つて彼女の頭頂部を見下ろしていた。

そして並ぶ二人を前に、改めてその身長とに息をのむチョロンであった。

「いい『』ンビだな。まるで兄妹みたいだ。」

「俺が弟で、サムライが姉貴か？」

「バカか、逆だろ。」

「。。。。」

チヨロンからの鋭い言葉がテストロイヤーに突き刺さり、彼は黙りこんでしまった。

「テ、テスさん。。。

「。。。。」

「ひょっとしてスネてるのか？」

「チヨロンさん！テスさんグラスハートなんだから。。。」

「う、嘘！何でも知っているこの私でも、それは知らなかつた。というかつまんないボケがますからいけねえんだろ？」

「テスさんはあれで真剣なの！」

墓石のように静かになつたテストロイヤー。

「つなつてしまつては、しばらく戻らないだろ。」

「と、とにかくアンタ達、時間はあるか？」

傷ついたテストロイヤーの心を取り戻すべく、チヨロンが眞面目な話を始めた。

「早急の依頼が届いている。アンタ達当てじゃないが、時間があるなら引き受けてくれないか。」

「どんな依頼なの？」

「依頼者を『池袋』まで連れて行つてほしいんだそうだ。」

「池袋だと？」

真面目な会話にテストロイマーが加わり、チーロンは安堵し、サムライは心中でガツッポーズをとつていた。

「池袋のどこだ？」

「そこまでは聞いていないね。」

東京都庁のある新宿から池袋まで、山手線で数分である。

だが侵略者達が蔓延る東京に公共交通など機能していない。

移動手段は自分達で確保しなければならない。

「連れて行つてほしい理由は何？」

「依頼者に聞きなよ。」

「安全ではないな、池袋は。」

「一般市民かの依頼じゃないから、依頼者も戦力になるつもりだと
思つよ。」

依頼の理由は不明だが、どうやら依頼者は池袋まで行く兵力がほし
いらしい。

「時間はあるから、とりあえず話だけでも聞きたいな。」

「賛成だ。依頼者はどこだ？」

「アンタ達の後ろ。」

立っていたのは少女だった。

薄黄色の長髪をツインテールに縛り、それを紫のリボンでとめている。

黒と紫を基調にしたゴシック人形のような服をまとめており、身体とタイツをはいた両足は針金のように細かつた。

そしてなぜか頭の上に、冠がのっている。

「ええと……」

サムライは見慣れぬ姿に困惑している。

池袋まで依頼者も戦力になると言っていたが。

田の前に立るのは、シックではあるが可愛らしい服装に華奢な身体。

武器らしのものも持っていない。

持っていたところでは、この少女が戦えるだらつか疑問もあるが。

物言わぬ少女に、テストロイヤーがチョロンに確認するが、依頼者はこの少女で間違いないようであった。

「池袋に向のようだ？」

「…聞いてどうするの。」

田木のような男の眼光を前に、少女は冷めた眼差しを返した。

「依頼を聞いてくれたのは嬉しいけど、私はあなた達が依頼を受けるか受けないか早く決めてほしいの。」

少女は淡々と自分の気持ちと、事情を言った。

年上であるサムライと、遙か上に見えるサングラスに怯む様子は見られなかつた。

怯むどころか礼儀が無い。

「で、でも、私達も依頼内容を詳しく知つておいた方が…。」

「『私を池袋まで連れて行つて。』同じこと何度も言わせないで、イライラするから。」

「あなたのこともよく知らないし…。」

「私、深く他人と関わることが嫌いなの。」

「あはは、そうですの…。」

なんとか田満に話そうとするサムライだが、取り付く島は無かつた。

「お嬢ちゃん、口のあき方には、」

「お嬢ちゃん呼ぼわりしないで。怒るわよ。」

嬉しい、イライラする、嫌い、怒る、といった感情表現を立て続けに並べた少女。

ポジティブな言葉が実に少ない。

そして、少女からのキツい言葉を受けたデストロイヤーだったが心は傷つかなかつた。

丸太のような腕を組み、ジッと考え始めている。

「どうするんですの、ヒーロー達、この子の依頼を受ける?」

「どういたしましょ、テスさん?」

「お前ら、お嬢ちゃんの口が移つているんだ。」

「お嬢ちゃんつて呼ばないで!」

三人の下から、荒い少女の声が聞こえた。

見るといつも、少女は小さな拳をギュッと握りしめ、猛獸のよつたな顔で三人を見上げていた。

「…子供扱いしないで！」

「「、「ごめんなさい。そんなつもりじゃ…。」

そんな少女を前に、チエロンが一人の耳元で囁いた。

「あの子の依頼は一時間前から出ていたが、あの子を見るなりみんな断つっていたんだよ。」

「一時間前だと、緊急の依頼じゃなかつたのか？」

「その緊急依頼が一時間前に出て、今にいたるといつわけだ。」

「そんな…。」

少女は一人へ背を向け、リボンのついた靴で地面を擦りながら、ロビーへと歩き始めた。

サムライが呼び止めようとするも、少女は振り返らず、イスへと腰掛けるのだった。

「どうやら一人を諦め、次の依頼者が見つかるまでせっしつてこりつもじのよつだ。」

「ありやつや、怒らせやつたか。」

少女の様子を見ても陽気なチュロソとは対照的に、サムライは暗い表情を浮かべている。

「迷つてゐるのか？」

「じつこつ事情があるのかわからぬいけど、そのまま放つてもおかないし……。」

「回感だ。」

「テスセモハツ思つへ。」

「ああ。」

「でも……。」

ためらうつなサムライ、「テストロイヤーは細んでいた腕を下ろし、彼女の頭へ手をのせた。

「傷はもう治してこる。心配するな。」

「ゴシゴシした『テストロイヤーの返事にサムライは安堵のため息を漏らし、チロロンが依頼認証の手続きを始めるのだった。」

本来、ハッカーとは高度なコンピューター技能や知識を持つ人を指す。

だがその意味は誤用され、ハッカーとは悪意を持つてコンピューターシステムを破壊する人を指す意味となってしまっていた。

2000年代まで、ハッカーの攻撃はいたずらレベルのものが多くたが、2010年代となるとその被害数も質も急速に変わった。

スマートフォン専用のウイルスが作られたことで被害数は増え、とある国のウラン濃縮施設のシステムをハッキング、及び破壊する程度にまで被害の質は成長した。

陸、海、空、宇宙に次ぐ第五の戦場としてサイバー空間が上げられるほどになり、『ハッカー』という肩書きは進化を続けていったのだ。

そして、その肩書きをコードネームに持つのが先を歩く少女であつた。

小さな背丈と、その足の長さでせつせと先を行く少女の背中をサムライとデストロイヤーが追いかけていたのだった。

正面玄関へと歩くこの三人の姿は、先を歩く妹を追う姉と兄（父親）みも見えるが）のように見える。

「依頼を引き受けってくれてありがとう。私はあなた達と違つて戦闘は不得意だけど、敵の能力を分析してその脆弱性をつくことに特化しているわ。」

改めて確認してみたところ、彼女も特務機関ムラクモに所属する戦闘員のようだ。

見慣れない姿だがそれも仕方ない、少女がいつ所属したのかもわからず、百人前後から成る戦闘員の顔全て覚えられるわけがない。

「コードネームは『ハツカー』。とりあえず依頼が終わるまでよろしく。」

一切振り返ることなくハツカーは挨拶と自己紹介を終えた。

今度は『さむらい』紹介かとサムライが意気込むや否や。

「あなた達…、『サムライ』と『テストロイヤー』ね。」

ハツカーは初対面二人のコードネームを言い当てた。

よく見ると小さな背中に隠れた少女の腕から、青白く透明な光線が垂直に立っているではないか。

小走りで歩きながら、ハツカーはその光へと指をあてる。

「あなた達の戦闘実績はかなり高いわね。依頼を申請してからかなり時間がたつたからハズレくじしか残っていないのかと思ったけど

…。」

ハツカ一の指にあわせ、顔写真までもが映る光の画面が動いているが、画面を支える『ディスプレイは無い。

画面は実態の無い光のよつこいに浮かんでいるだけなのだ。

「余り物にも福があるのね。」

ハツカ一が腕を下げる、薄く平らな光の画面は跡形も無く消えるのだった。

「『ハツカ一』か、じゃあ『ハツちゃん』だね。」

「…。」

サムライの言葉にハツカ一は何も答えない。

自分の能力を説明したはずが、まさか名前に食いつかれるとは思わなかつたろう。

「でも呼びづらいな。じゃあ『カ一ちゃん』かな。これだとお母さんみたいになっちゃうよつくな…。」

歩きながらサムライがおでこに人差し指を当て始めた。

「じやあ…『ハ一ちゃん』…かな。」

「おー、やめておけ。」

やめさせようとするが、ハッカーからの口から拒絶は無かった。

「…………好きにして。」

変な名づけにハッカーが喜ぶとは思えなかつたが、意外にも彼女がそれを否定しなかつた。

肯定でもなかつたが、いつの間にか先を歩いていたハッカーの背中がサムライ達へと近づいていた。

廊下が終着に近づくと、ハッカーの背中を通りこし、デストロイヤーが正面玄関のドアに手をかけた。

その時、聞きなれた声が一人を呼び止めるのだった。

206 その男、おバカにつき

「よひ。デカブツとお嬢さん。」

見ると黄色いスーツにオールバックヘアの男が立っていた。

「この野郎。」

とデカブツと呼ばれたデストロイヤーは、ドアから離れ男へと進撃する。

両腕を揺らしながら近づく巨体を臆することなく、ニヤニヤと黄色い男はそのサングラスを見上げている。

何を思ったのか、男は握手するように右手を斜め上に差し出した。対してデストロイヤーが左手を斜め下に出し、出されたそれをつかんだ。

握手するよう組み合わされた不似合いな二つの手。

しばらくの沈黙の後。

「…痛い。」

黄色男の顔が歪み始めた。

「痛い痛い痛い痛い、ギブギブギブ、ギブアップ！」

ひたすら手を振りほびひつとあるが、テストロイヤーは放さない。

「誰がデカブツだ？」

「許してテスちゃん！俺が悪かった！」

「ちゃん」付けで呼ばれることが嬉しいわけがないが、謝っているのでとりあえず男の手を解放するのだった。

「あ、ああ…。全然かなわないぜ…。俺だつて鍛えてるのにみよ。

」

「所詮鍛え方が違う。飛び道具に頼るお前では俺に勝てん。」

「まあ、さっきのは俺も本気を出しなかつたからな。」

「なに？」

先ほどの悲痛な表情はどこへやら、男はケラケラと笑い出した。

笑い声を見上げハッカーは遠慮なくため息を吐き出したのだった。

おバカなこの男も「サムライ」や「テストロイヤー」と同期の特務機関ムラクモに属する戦闘員である。

「トリックスター」

それがこの男のコードネームだった。

見上げつつもバカを見下すような目つきのハッカーに気づき、サム

ライは慌ててその口を封じようとする。

「トリさんは今から外へ行くんですか？」

「な、なぜわかつた……！」

まるで知られたくない過去の過ちを解き明かされたかの『』とく無駄に劇的に驚き返すこの男を前に、再び腹式呼吸からの全力のため息がハツカ一の口から吐き出される。

サムライは苦笑いを浮かべ「姿を見れば分かりますよ。」と返すのだった。

「ハハハ、だよな。一目瞭然だろ。」

トリックスターの背中に巨大な筒がまかれていた。

そして両太股にはホルスターと両肩から腰にまかれたベルトと膨らんだポケット、この男の戦闘時の服装であった。

「俺はデカブツと違つてか弱いからな。お守りがたくさん必要なのや。」

「どこへ行く予定だ？」

「とりあえず新宿駅から山手線だ。」

山手線という言葉に三人が反応する。

「面白い機械を見つけたんだ。その点検も兼ねて少し山手線を走らうつかと思ってな。」

侵略を受けたとはいえ東京にも様々な機械が残っている。

侵略を生き延びた人類はそれの中から使える部品を集め独自で武器や道具を開発することがあった。

どんな機械かと、サムライが聞くと彼はこう答えた。

「もともとは大型トラックのエンジン部分だ。で、その車輪部分を改造して線路を走れるように設計したのさ。線路自体に問題がなければどこまでもいけるだろうが、何せ試作機だからな。点検も兼ねて近場を走らうと思っていて、まあ池袋までかなあって思っていたんだけど、…………ってなんだお前ら、近い近い近い、近いって！」

超ご都合のいい話へ、三人の顔が磁力に引き寄せられるかのごとくトリックスターへと迫っていた。

「それを使えば池袋まで早く着けるのか。」

「で、ですけど……。」

「何人乗り？」

「五、六人は乗れるが……。」

「ねえハーチちゃん。目的地は池袋駅から近いかな？」

ハッカーは何も答えず、トリックスターの前に立つた。

時間の浪費かと思いきや、目の前にいる男は池袋まで最速でたどり着ける手段を持っている。

そして依頼を引き受けてくれた一人はこの男と顔がきくらしい。

渡りに船とはこのことである。

「せつしきから気になつていたんだけど…。この子誰?」

ため息を吐き出しそうになるが時間の節約のためにそれを抑えハッカーは言った。

「私を池袋へ連れて行つて。」

「今何時？」

「毎の一時だ。」

「早すぎるよ。」

「早すぎない。」

「わいべさあ、足が冷えちやつて冷えちやつて眠れなくつてさあ…。」

「それはお氣の毒にな。」

トリックスターは都庁のHONTAラシス広場（路上）で丸まっていた青年を起こした。

「で、今何時？」

「毎の一時だ。」

「人間が起きる時間じゃねえよ。」

「起きる時間だ。さあ行くぞ。」

肩を貸し、酔つぱらっこを抱くかのように一緒に歩き出す。

「だいたい今何時だ？」

「毎の一時だ。」

寝ぼけて同じ質問を繰り返すこの青年が、トリックスターの相棒である。

青年という表現は正しくないかもしない。

やせ細つた体と、常にお辞儀をしているかのように七十度に曲がった腰、そしてボサボサの白髪を隠すように深くかぶつたフード。

不良という表現をすべきだらうか、それともインフルエンザ患者と表現すべきだらうか。

「アハハ、相変わらずだねサイさん。」

「今何時?」

「お昼の一時だよ。」

『サイキッカー』

それがこの青年のコードネームである。

武器を使わず、人知を超えた攻撃手段を持つことからそういう名付けられた。

だが日頃の彼の姿からその力を疑問視する者を多い。

と云ふが、どうして路上で寝ていたのか。

ハッカーが相変わらず嫌なものを見るかのようにサイキッカーを見

上げているが、それは彼女の性格によるものではなく、初対面の者のほとんどが彼女と同じようにしたであつ。

「新宿駅まで一緒に行こうと言つたが、コイツは元気ハツラツになるまで戦力外と思った方がいいぜ。」

「だろうな。できるだけ早く起きてくれると頬もしいがな。」

「ほらね、テスさんすらもサイさんのことをする」と思つていろんだよ?」「

サムライが不満げな顔を浮かべるハツカーへ言つが、彼女は聞く耳を持たなかつた。

ハツカーは何も言わず、リボンのついた革靴の音を響かせながら、さつさと先へ進んでいくのだった。

サイキツカービーかサムライ達にも興味がないかのようだ。

「ハーチャン…。」

「急いでいるようだからな。これ以上無駄話はできない。」

「今何…。」

「それは悪かつた。コイツはともかく、俺は足を引っ張らないぜ。」

それに四人が続き、一行は中央通りを進み、新宿駅へと向かうのだった。

砂糖のたっぷり入ったコーヒーを一気に飲みほし、男は休憩を終えた。

マグカップをそのままにして、浴室を出、指令室へと戻る。

仕事はいつも疲れるが、今日はよういつそ疲れている気分がした。

彼は苦笑の決断を下したからである。

彼は『特務機関ムラクモ副長官』の肩書きを持つていた。

名前は『きりのあやふみ桐野礼文』。

名刺を渡しても、正しく呼んでもらえることが少なかつた。

決して難しい字ではないが、漢字は現代の日本で失われつつあったからだ。

もとよりアーヴィング襲来以降の日本から名刺など渡したことになかったが。

彼の名は礼儀を重んじる父親と、文学科の母によつてつけられた。

その影響もあって、桐野の外面は誠実で知的な雰囲気が漂い、さうに細いフレームの眼鏡がそれをいつそう際だせていた。

絵画の並ぶ廊下を歩いていたが、桐野はずつと自分の足下に視線を落としていた。

犠牲無くして勝利は無い、とひたすら自分に言い聞かせたのだ。

決断を下したのは一時間前である。

池袋を調査していた戦闘員からの救援要請が本部に届いた。

救援地点の距離、時間、必要兵力を踏まえ、桐野は冷静かつ迅速に決断を下した。

救援を待つ戦闘員へオペレーターが無線機に告げた言葉は

「現状戦力で対処せよ、以上。」

であった。

ドラゴンの数やフロワロの規模でさえ把握しきれていないにもかかわらず、不確実に貴重な戦力を削ぐわけにはいかない。

そして現段階における最重要作戦が『歌姫計画』なのだ。

余計なことにエネルギーを注ぐわけにはいかないのだ。

だが彼は非常にりきれない。

ドリゴンとの戦いが続く限り、この仕事は続き、彼の心は蝕まれていくだろう。

司令室のドアを前にし、桐野は胸ポケットからエロカードを取り出しそれをかざした。

こうしたことを繰り返すと、戦闘員達の士気を落とし、やがて内部分裂が起こる危険性もあつたが。

この指令室には一般人はおろか、戦闘員達でさえ簡単に入ることはできないのだ。

ハッキングでもされない限り公に出るのはないだろう。

N・1 山手線

山手線は姿を変えて顕在した。

線路の一部は途切れ、倒れたビルが横になり、あるところは電車自体が道を阻み、かつて首都上空に描かれていた橿円はつぎはぎだらけとなつていた。

無論、電車は走つておらず首都を繋ぐインフラとしての機能は果たせていない。

それが今の山手線であつた。

その灰色の線路を鋪び付いたトラックが走つていた。

普通の軽トラックだが、バンパー部分の下半分には「」字に曲げられた鉄板が貼られていた。

三角に突き出た鉄板が小さな瓦礫をかき分け道を切り開いている。

運転手にはトリックスター、助手席にはサイキッカーが体育座りで眠つている。

そして三人は荷台に乗つていた。

隅に座つたハッカーに寄り添うようにサムライが腰かけ、なぜかデストロイヤーだけ腕組みをして立つている。

荷台から飛び出たその姿をみると、このトライックが銅像を運んでいるかのよつこみえる。

「時速二十キロは出でている…これなら早く着けそうだ。」

どつやられる景色を見て速度を計算しているようだ。

筋肉バ力に見えて、意外にグラスハートであり、意外に知的かもしれない。

サングラスが陽の光を反射させることはなく、映るのは破壊された都市の風景とそれらに寄生する蔓とフロワロだった。

時折それらの合間を蠢く気配も感じられる。

今の首都は侵略者トライック達の縄張りであり、池袋へ下りればその縄張りへと立ち入ることとなる。

「ハーチャン？」

ハッカーが荷台から運転席の小窓をのぞいた。

「…御用ですか、ハッカーさん？」

事前にお嬢ちゃん呼ばわりと無駄な会話を嫌う」とを聞いたため、トリックスターは普通に話した。

「中を見たくて。」

「改造とは言つたが、この車は故障していた本来の部品の代替品を集めただけさ。」

「見てわかつたわ。」

「そうか。」

トラックが揺れ、背伸びを支える爪先がせりて揺れている。

「こんな広い荷台ならもつと大きなモノも運べそうだね。」

「その通り。使える設備や機械が発見できれば都庁まで楽に運べる。だからトラックにしたのさ。」

「…人も運べるわ。」

「…？」

サムライが横から顔を出してためか、避けるようにハッカーは背伸びをやめ、もといた場所へ座ろうとした。

しかしその時、聞きなれない声が彼女を止めた。

「計器が狂つたぞ。」

その声は助手席からであった。

見ると眠っていたサイキックカーが目を開いていたのだ。

「起きたか？」

「・・・・・」

「サイさん、狂つたってどうこいつ」とへ

「一瞬だつたが計器全部の針が止まつた。運転していく何か違和感は無かつたか？」

彼は質問に的確に答えた後、トリックスターへと確認した。

「ああ、ほんの数秒だつたがアクセルの抵抗が妙に大きくなつた。五、六キロ走つたが、おかしくなつたのはそこだけさ。」

彼の目覚めに驚くことなく、トリックスターは運転開始からじこまで記憶していた事実を淡々と言つた。

「どんな抵抗だつた？」

「強く踏んでも車が前に進まない感じだ。まるで真下から引っ張られているみたいにな。」

ただの計器の異常であればトラックの故障かもしれないが、運転手の言葉から、彼は何か原因が別にあると察しているのだろう。

「…サムライ、ハッカー。君たちは何か感じたか？」

サイキッカーが振り返らず、後ろの二人へ言葉を投げる。

「いえ。」

「私も特に何も…。ただ…。」

「ただ、なんだ？」

催促する彼に、サムライは自分の刀を掴み、首をかしげながらも答えた。

「刀が一瞬だけ、重くなつたような気がしたの…。」

「刀が？」

「勘違いかもしないけど。」

「……。」

答えを聞くとサイキッカーは同じ姿勢のまま、小さなうなり声を上げた。

誰に言われたわけではないが、三人は彼の次の言葉を黙つて待つた。

サムライとトリックスターは彼がただの睡眠不足の病人でないことを知っていたからだ。

そして彼の真面目な声とそれに答える一人の姿から、ただならぬ様子でハッカーも彼の言葉を待っていたのだった。

だが沈黙を破つた第一声は、

「わからない。」

その言葉にサムライがズッコケ、ハッカーがため息を漏らし、顔を下げもといた場所へと座つた。

だがトリックスターだけは真剣な表情を維持したまま、聞き返していた。

「何が、わからない？」

「…足下の怪物に勝てるかどうか。」

その言葉にサムライが顔を上げた。

「…サイさん。ひょっとして、」

彼女の表情も声も、都庁やハッカーに見せていたものとは別であつた。

彼女も車体と計器の異常が故障ではなく、そして刀の重みがただの勘違いでもないと察していたのだ。

そんな彼女に言葉は返さず、彼の最後の言葉はたつた一言であつた。

「IJの付近は早めに抜けた方がいい。」

「そうだな。」

サイキックカーの指示に、トラックスターはさらにアクセルを踏み込んだ。

エンジン内部で燃えた空気がギアを動かし、その動きは様々な軸を通じ最終的にタイヤへと伝わる。

金属むき出しのタイヤが火花を上げ、コンクリートに囲まれた線路の上をトラックが走りぬけていった。

三人はスクランブル交差点を渡りきつた。

後ろには様々な路線の出発点をもつ巨大な駅がたつてゐる。

新宿駅同様に構内は広く複雑であつた。

ホームから出口へ行くだけで右往左往と歩き周り、途中何度も怪物と遭遇したほどだった。

さらばにその駅には百貨店が隣接し、この駅を中心に繁華街が形成しているかのようだ。

本来なら中央の壁面に駅名を記した文字看板があつたが、それは半壊していた。

そして駅から続く町は渋谷と並ぶ山手の副都心、池袋であつた。

スクランブル交差点を渡つた先には、中央に白い線が描かれた長い道が続く。

その道は今も昔も道路と呼ばれている。

車が大量かつ同時に走るために作られたらしい。

だが今は道の両脇に立つ廃墟ビルから崩れ落ちた瓦礫や鉄骨が散乱し、本来の役目をはたせそうにはなかつた。

風が吹くと鏽びた鉄の臭いが鼻腔を刺激し、まきあげられた花びらや花粉が入らぬよう視界を細めなければならぬ。

半壊したビルの隙間から毒々しい極彩色の花が咲き乱れている。

渋いコンクリートの色に生えているため、けばけばしいそれらの花は異様な存在感を放つていた。

花だけではない。

発信源不明の大樹の茎や枝が蛇のように建物にからみついている。

血管のような細かなサイズもあれば、内部から壁をぶち抜くような大樹もある。

荒廃した都市とは対照的にそれらの花は生い茂り、大樹は丸々と太つていた。

まるで都市から生命を奪い尽くし、自らの命を繋いでいるかのようだつた。

「ハッカー。」

「デストロイヤーが我先に行く背中を呼んだ。

都庁から駅の中、そしてこの暗い道路でも、ハッカーは先を歩いた。

「おいハッカー。」

「歩きながら答えるわ。」

「ハーチャン。」

「じゃあ歩きながら提案しよう。俺が先頭に立つからハッカーは後ろへ下がれ。」

三人がどこを目指すかトラックからホームにおりた時に聞いていた。

目的がわかれば、ハッカーが先頭に立つ必要も、メリットも無い。

トリックスター達はトラックの点検も兼ねて駅のホームへと残つているため、彼女を守るのはサムライとデストロイヤーだけなのだ。

そしてそれは彼女もわかつっていたのだろう。

「わかつたわ。」

と言つと、その場に立ち止まり一人が来るのを待つ。が、その間も腕から光の端末を広げ、これからルートを検索しているのだった。

「目的地へはこの大通りを道なりにまっすぐ、東池袋で右折して最初の交差点を左折すれば最短ルートよ。」

三人が目指す場所は、東京都豊島区東池袋3丁目、サンシャインシティ・ワールドインポートマートビル。

通称名、池袋サンシャインであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6840y/>

セブンスドラゴン2020

2011年12月1日17時45分発行